

令和3年度 杉並区立荻窪小学校 経営・評価計画「自己評価報告書」・「学校関係者評価報告書」 校長 西脇 裕高				学校関係者評価委員会委員長 佐野 英之		
学校の教育目標				◎美しい心の子ども ○深く考える子ども ○たくましく生きる子ども		
令和3年度 経営計画・評価計画						
区分	評価指標・評価基準			結果と成果	評価	
重点目標	目標実現のための方策		取組(努力)	結果と成果	評価	
特色ある教育活動	「心を育てる」人間の尊厳教育(ヒューマンディグニティ教育)の推進	・思いやりや美しい心をもった子どもを育てる。自分と他者との違いを認め、どのような存在として関わり合い、人間関係を築いていく。また、オリンピック・パラリンピック教育を推進し、障がいのある人への理解を深め、共生社会の実現や国際社会の平和や発展、貢献について考える。	・「心を育てる」書の学習「言葉のチカラ」の実施。 ・特別の教科道徳における「話し合い、考える」授業の充実。 ・人権メッセージ(命・友達・いじめをなくす。ありがとう、よい学校)の通年実施。 ・オリンピック・パラリンピック教育のレガシーの継続。	・今年度で書の学習「言葉のチカラ」を実施し、自分を見つめる時間の大切さを学ぶことができた。 ・特別の教科道徳「話し合い、考える」授業年、子どもが主体的に学び、心を育てる機会にできた。 ・人権メッセージの全校実施が定着し、子どもの自己理解、他者理解が深まった。 ・東京オリンピック・パラリンピックの開催を通して、国際理解や障害者理解の契機がもてた。また、自国を見つめる機会もなり、自国文化の良さを再確認できた。	3	・問題行動のある子どもに対して、教師が1対1で指導するだけでなく、クラスの子どもたちも一緒にその子の個性に配慮しつつ自らが考えながら行動しているように見える。 ・「自分は人たちが育ててくれたんだ」という意識が自己肯定感にもつながる。個を伸ばすという方針をより一層学校生活の中で浸透させてほしい。 ・「人間の尊厳」というのは一朝一夕に身に付くものではなく、周囲の大人たちの言動も含め、常日頃から継続的に子どもたちに言い聞かせ、浸透させていくことが非常に重要だと思う。 ・「尊厳」とは抽象的なものであっても、伝える側としては難しいテーマであるが、特に今年度はオリンピック・パラリンピックといった目に見える、子どもたちにとって分かりやすいイベントがあり、コロナ禍でも教員の尽力で、良い経験ができていたと思う。 ・東京オリンピック・パラリンピックと続き、東京夏季オリンピック・パラリンピックと今年度は、特別な経験ができる年で、生きた教育として努力された。 ・どの学年も落ち着いて学校生活を送っているようであり、道徳や「人権メッセージ」、「言葉のチカラ」などの指導や活動を通して思いやりをもってお互いを理解しあがり心合っている。 ・「言葉のチカラ」では書を生かすだけでなく、自己を見つめる機会も必要だ。それを全学年に実施していることは大変意義あることだと思う。 ・子供の年齢で、自分と他者との関係を理解することは、難しいことだと思う。しかし、この年齢の時に人格が形成されることも確かである。書道の学習「言葉のチカラ」を自分を見つめる学習に位置づける取り組みは貴重なことと思われ。 ・教育目標の最重要項目である「美しい心の子ども」を育てるため、一番取り組みを強化すべき施策であり、厳しい環境下においても、工夫しながら継続的に推進していると理解している。 ・コロナ禍でも、大人でさえストレスを感じるような環境が起る中、大きな問題もなかったり学校生活が送れているということは、子どもたちの心が豊かであるという点で大きなことだと思う。 ・全学年の指導を通して、どの学年もびびり自分の意見を発言し、他者の意見も認めると言うクラス環境が感じられる。
	「一人一人を大切に」特別支援教育の理解と推進	・「一人一人を大切に」という視点で、保護者に全校で取り組む特別支援教育について理解を得、安心できる学級・学校となるように体制を整え、必要に応じて相談・指導を行う。特別支援教室「すまいる」での指導の充実と通常の学級との連携指導 ・通常の学級における指導、支援の充実、ニーズに応じたきめ細やかな指導を工夫している。	・全学級で取り組む特別支援教育の保護者理解の推進 ・特別支援教育校内委員会の毎週開催。 ・特別支援教室「すまいる」と通常の学級との連携指導 ・通常の学級における指導、支援の充実。	・特別支援教育校内委員会を毎週開催し、組織的に指導支援策を検討した。 ・特別支援教室「すまいる」の保護者質問会を開催し、入室希望者が増え ・特別支援教室「すまいる」の巡回指導教員と在籍学級担任の連携の時間を十分に取ることが課題。 ・巡回心理士や教育支援チームの助言も生かし、通常の学級における指導、支援の充実が図られ、落ち着いて学ぶ子どもが増えた。 ・教育調査「特別支援教育の理解・啓発」の保護者肯定率は50.5%に留まっている。(否定率5.9%)	2	・特別支援教室と通常の学級の連携の時間をさらに生み出す工夫をする。 ・「すまいる」教室の存在に特別感がないことが素晴らしいと思う。
	「つながりを活かす」小中一貫教育・幼保小連携教育の推進	・小中一貫教育のグループである富岡中学校、久我山小学校、本校の3校で、「つながり、つながり」を重視し、小中一貫教育を一層推進する。また、幼保小連携では、近隣保育園と連携し、新1年生のスタートプログラムについての検証を行う。	・小学校と中学校の学校間の交流推進。 ・9年間の系統性と連続性のある指導の推進。 ・グループ3校での「主体的・対話的で深い学び」の実現。 ・近隣保育園5園との交流推進。 ・幼保小連携研修会の開催。	・コロナ禍で活発な交流は難しかった。 ・中学校生徒会役員が来校し、中学校生活説明会を開催した。熱心に話を聞く6学年の子ども姿があった。 ・近隣小中3校による連携研修会を開催した。 ・近隣の5保育園が学習発表会の1年生発表を見学した。 ・近隣保育園と小学校での連携研修会を開催した。 ・教育調査「小中一貫教育」の保護者肯定率は29.5%に留まっている。(否定率12%)	2	・小中一貫教育や幼保小連携による「学びの連続性」の価値を保護者、地域に十分に伝えていく。 ・幼保小連携により本校の「スタートプログラム」を改善する。 ・研修の内容を見直し、教員間の児童生徒理解を深める。 ・区の施策の成果を、保護者、地域に十分に伝える。
	「広い目を育てる」環境教育の継続・充実	・エコスクールとして、本校の特色である環境教育を継続、発展させ、日本建築学会や学校支援本部と連携しながら、「自分と社会」を築き、今さらいなければならない、地球環境を守り、持続可能な社会を意図して、自ら考え行動できる子どもを育てる。環境活動に積極的に取り組み、小中学生環境サミットに参加する。	・狭小環境学習プログラムの充実。 ・環境委員会の活動の充実。(区環境サミット参加) ・エコシステム校舎の保護者・地域の方々の理解促進。	・学習指導要領改訂に合わせて環境学習プログラムの見直しに取り組んだ。 ・学習発表会では、第6学年がSDGsをテーマに発表した。 ・環境委員会の子どもたちが、環境ボランティアの協力のもと活動した。 ・環境サミット参加に協力し、環境委員会の活動をまとめることができた。 ・コロナ禍で保護者、地域向け「エコツアー」は開催できなかった。	3	・まるとエコスクールを活かした狭小環境学習プログラムの充実を希望する。 ・子どもたちに一番身近な校舎が、校舎の施設・機能に関わる説明だけでなく、どんな視点から建設されたものなのか、他校より優れている点、その効果も含めてプログラムに組み込まれると、子どもたちの狭小・地域愛につながるのではと考える。 ・学習指導要領改訂に合わせて、プログラムの見直しに取り組んだことは、評価したい。 ・学習指導要領改訂があり、環境学習プログラムの見直しに取り組むことができたが、理科から社会科に環境のとらえる場面が変わったことから、子どもの理解や興味をもたせ方において、物の本質から、社会現象の理解へと変わらなければならない。 ・エコスクールという恵まれた環境を有意義に活用している。子どもたちの意識の高さを感じることが多い。 ・「広い目」ではなく、「広い視野」をもった子どもを育てる一環として環境教育は狭小の誇りとなっている。 ・ICTを活用しては保護者の肯定率が上がったが、学習成果の実感については昨年より下がっている。低学年のタブレットの活用については特に工夫が必要ではなかったか、コロナ禍の中で学習についての評価も不安定な面ではなかったと思う。 ・タブレット端末に関しては、各学年に開いた説明・使用上のルールなども明確に示し、様々な障壁がある中、比較的スムーズに導入が進んだものと考える。 ・コロナ感染症の影響から、タブレットを使った教育手段が急速に変化する機会を捉え、個々の興味を全体につなげる教育方法に力を入れたい。 ・教員もICTを授業の中にもっと取り入れており、内容が豊かになっていると感じる。併せて、実体験も重視していることは大切だと思う。
	学習指導	・校内研究として、主体的・対話的で深い学びの成立を目指す授業力の向上	・「学ぶ子どもを育てる」を研究主題に、「問いをもち、考え、話し合う」授業を展開。 ・「学びの場」を積極的に活用し、どの子どもにもわかりやすい学習展開を工夫する。	・「学ぶ子どもを育てる」という研究主題のもと、「問いをもち、考え、話し合う」授業を行った。 ・1人1台のタブレットを活用した学習を全学年で実践した。 ・学校だけでなく、地域と連携し、子どもたちの学びが変わっている様子や、保護者・地域に周知した。 ・教育調査「ICTの活用」に関する肯定率は、保護者73.0%であった。児童も92.5%であった。 ・6学年の子ども「探究的な学び」「協働的な学び」の肯定率が9割となっている。 ・教育調査「学習成果の実感」の肯定率は保護者74.4%(否定率5.5%)、児童84.3%(否定率4.5%)であった。	3	・「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、授業改善を推進する。 ・一人1台タブレットPCを活用し、個々の学びと協働的な学びを展開する。 ・各学習調査を分析し、授業の成果と課題を把握する。 ・問題解決的な学習を、全教科・領域で展開する。
	生活指導	全校による生活指導体制の確立	・「学校いじめ防止基本方針・全体計画」の実践。 ・いじめ防止対策委員会の毎月開催。 ・「狭小スタンダード」に基づく共通指導の徹底。 ・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーとの連携。	・毎月、いじめ防止対策校内委員会を開催した。 ・いじめのアンケートを年間3回実施し、課題解決に役立てた。 ・現在、未解決のいじめ案件はない。 ・不登校傾向等については、組織的対応を心掛けている。オンライン活用等により、学校につながる機会を増やしている。 ・感染症予防に努め、大きく体調を崩す子どもも無く、過ごせている。 ・教育調査「教育相談体制」の保護者の肯定率は60.4%、「いじめ対策」50.4%、児童の肯定率は73.2%であった。	3	・子どもたちは、コロナ感染症予防のための生活習慣の徹底に取り組む、生活や学習の様子を見て大きな課題は見られない。全校体制での生活指導の成果が現れている。 ・狭小スタンダードが一定、子どもたちに浸透していると考えているが、学年・学級によりバラつきがあるように思う。まずは狭小スタンダードが習慣になるよう、反復することが大切だと考える。 ・いじめ、不登校などへの対策について保護者の肯定率が高いか、具体的な対応策や相談体制について一層の周知が必要であると思われる。 ・いじめ防止だけでなく、いじめを感じた側どう対応したらよいかという教育も必要なのではないかと思う。 ・具体的ないじめ対策の効果は、全校の子どもたちの安定したゆたかな表情をみて、高く評価したい。 ・いじめアンケートは学年が上がるにつれて、100%正直に記載できない子が増えていると感じる。子どもたちから正しい情報を吸い上げるのは非常に難しいことだと思うが、定期的ないじめ対策委員会の開催や日頃からの見守りをぜひ継続したい。 ・現段階で立派ないじめはないが、いつでも声をあげられるよう、環境を整え、そのことを子どもや保護者に伝える努力をさらに進めていこうと思う。 ・学校が楽しい場所ではないが非常に主体的な問題で、保護者の自由意志でも様々な意見が出ているが、どの子どもも安心できる居場所を学校にすることが大事だと思う。 ・少し違う視点になるが、ヤングケアラーに対する杉並区や学校の体制等、課題として考えていきたい。
	体力向上	年間通して全校で取り組む体力づくり	・体力調査を実施し、体育の授業改善や日々の遊びや体育の授業、特設の体力向上の取組(狭小)の実施で、体力づくりに取り組む。	・体力調査を実施し、実態と共に、体力向上への意識を高めた。 ・「狭小パワーアップカード」を作成し、継続的に体力向上に取り組める環境をつつた。 ・栄養教諭と学級担任が連携し、食育授業を行った。 ・教育調査「体育・健康教育」に関する保護者の肯定率は76.6%(否定率4.3%)であった。	3	・「体力」は運動、食育、生活習慣の総合力と捉える。 ・栄養教諭、養護教諭の参加による指導を充実させる。 ・「狭小パワーアップカード」を効果的に活用する。 ・「普通」等の身体的な活動を待遊びの良さを取り入れる。
	特別活動	子どもが中心となった特別活動、学校行事	・高学年への「あこがれ」低学年への「やさしさ」をテーマに、子どもの自主的、実践的な態度を育て、自分のよさを生かす学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事を実施する。	・コロナ禍により行事、特別活動は制限をかけて実施した。 ・異学年交流「サクラソウ祭り」を実施し、全校の子どもたちが交流した。 ・代表委員会を中心に周年記念集会を企画運営した。 ・コロナ禍で回数や内容が制限されたが、縦割り班活動「なかよし班」遊びを実施した。	3	・子ども主体の特別活動を工夫し、互いに認め合える交流を広げる。 ・青少年赤十字活動実践校として、活動を充実させる。
	学校運営	学校支援本部との連携	・学校支援本部と連携し、質の高い授業や安全に配慮した授業を提供する。	・学校支援本部の協力のもと、特色ある教育活動を展開できた。 ・書の学習「言葉のチカラ」を全学年で実施した。 ・地域の協力により学校園等の栽培活動を進めた。 ・校外学習や実習の安全管理が十分にできた。 ・教育調査「地域との協働」の保護者肯定率は68.8%、児童67.6%であった。	3	・人と触れ合う学びを大切に、地域人材の活用を図る。 ・保護者に、学校支援本部の活動を周知し、保護者の地域参画意識も高める。 ・地域連携活動を展開し、子どもの「地域を見る目」を育てる。
	学校運営	学校運営協議会との連携	・保護者や地域と共に創るコミュニティスクールとしての学校づくりを行う。 ・「学校運営協議会委員」を中心に学校関係者評価を実施する。	・毎月、学校運営協議会を開催した。 ・コロナ禍により教育活動参観の機会は限定的であった。 ・毎回「学校運営協議会だより」で各家庭に、協議内容を周知した。 ・学校関係者評価で、学校運営協議会委員を中心に、学校評価を行った。 ・教育調査「経営全般」の保護者肯定率は80.5%(否定率3.6%)「学校評価」肯定率68.8%(否定率4.1%)であった。	3	・多角的な視野や多様な意見をコミュニティ・スクールの良さとし、「地域の学校」として充実した学校経営を進める。 ・PTAと学校運営協議会の懇談会を通して、保護者のコミュニティスクールの意義の理解を深める
その他	指導の組織化	・スクールサポートスタッフの配置により、校務軽減が図れた。 ・それぞれの専門性や立場の違いを生かした教育活動支援ができた。 ・学級支援員や介助ボランティアにより、個に応じた支援ができた。	・スクールサポートスタッフの配置により、校務軽減が図れた。 ・それぞれの専門性や立場の違いを生かした教育活動支援ができた。 ・学級支援員や介助ボランティアにより、個に応じた支援ができた。	3	・すべての教職員が重層的に子供に関わり、みんなで子供を育てる。 ・教員間で切磋琢磨し、多様な人材を互いに活かし、教育活動を充実させる。 ・「学ぶ子どもを育てる」ため、自己研鑽し、自らが学ぶ教職員組織でありたい。	
その他	人材育成	・OJTおよびOff-JITによる人材育成を、組織的・計画的な主体的に行う。	・若手教員の育成授業を校内教員も観察し、意見交換した。 ・都中堅教諭賞賞状向上研修の機会を通して、互いに情報交換し学び合えた。 ・自己申告の授業観察時に、学期1回以上の授業公開を行った。 ・校外の研修会に参加した教員が、校務システムにレポートを掲載し、学びを共有した。	3	・⑩と同様に、学校に関わる様々な組織と人材について、どの組織が何を支援しているのかが分り難いところもあると思う。またそういった情報発信の際には、文字量より視覚的なビジュアルコンテンツだとより一層伝わるのではと考える。 ・現在の荻窪小学校は、トップダウンとボトムアップの双方と手を取り合っているからその良い雰囲気なのだと思っている。この回転が切れぬ限り、この継続してほしい。 ・本校の教育や校務等に関わって多くの人材が専門性を発揮し、それぞれが役割を果たしている。学級支援員や介助ボランティアにより、子どもたちに適切な支援をしている。 ・教員間の連携がはかどっていると認められる。 ・ICT環境により創出された時間を活用し、AIが得意な領域である教育者の育成につなげていくことが非常に重要だと考える。 ・本校教員は手厚いのが、互いに授業参観し意見や情報を交換して学び合い、子どもたちの教育に熱心に取り組んでいる。 ・担任によって学級運営に差があるという保護者の意見がいくつか見られたが、経験の浅い若手教員に最初から多きを求めるのは難しい。学年がひとつづつチームとなって指導に過不足のないように働いてほしい。	